私の影法師

—自選エッセイ集—

遠藤周作

桂　芸　術　選　書

私の影法師

自選エッセイ集

遠　藤　周　作

桂　書　房

桂 芸 術 選 書

遠藤周作　略歴

大正12年３月27日東京に生る
慶応大学卒業　フランス留学
昭和30年上半期「白い人」で芥川賞受賞
その他主な著書「海と毒薬」「沈黙」他多数。

私の影法師　　定価４９０円

昭和42年10月１日　発行

著　者　遠藤周作
発行者　梅田幸雄
印　刷　工友会工業所
発行所　桂書房
東京都千代田区神田錦町３－１５
（加藤ビル）
電話（293）8676　振替東京44354

© 1967 Printed in Japan

目

次

目次

I

1. 私とキリスト教……7
2. 文学とキリスト教……19
3. カトリック作家の問題……31
序にかえて……32
a. 神々と神と……37
b. カトリック作家の問題……44
c. 回宗の苦悩……56
ジャック・リウイエール（クローテルとの往復書簡）
d. 憐憫の罪……75
グレアム・グリーン（事件の核心）
e. 情慾の深淵……89
ジリユアン・グリーン（宿命）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

II

1. 宗教的イデオロギイと文学との関係……107
2. 宗教と文学……117
3. 芸術の基準……133
4. キリストの顔……139

III

1. ボルドオ……149
2. テレーズの影を追って……171
3. 葡萄の丘と夏の雲……197
4. フランスにおける異国の学生たち……215

あとがき……257

装幀　菅野　陽

I

1. 私とキリスト教

私とキリスト教

「信仰と私」という題でお話することになりましたが、いざとなってみますと、何か深い羞らいさえ感じます。と申しますのは私は所謂、自発的な改宗者ではないからです。くるしい人生の迷いや、思想的な遍歴を経たあとに、教会に救いを見出して洗礼をうけた人間ではない私は、お話すべき告白も思い出も別にないからなのであります。

私は子供の時、カトリック、つまり基督教の洗礼を受けました。厳密に言えば受けさせられたと言って良いでしょう。何分子供の頃ですから、深い思想の悩みも人生の悩みもあったのではありません。私は夾竹桃の花の咲く阪神のある教会で、年とった司祭から、神やキリストや、キリストの生涯について話を聞き、ただ、その話を素直に信じたに過ぎません。

当時のことを考えて、もし私にこの神父さまの話についていけないような悩みがあったとしたら、それは恐らく「キリストは何故、西洋人の顔を持っていられたのだろうか」というぐらいの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことだったのです。考えると微笑ましいこの懐疑も、洗礼をうければすぐ消えましたし、私ははじめて聖体を受けた日、非常に幸福でした。

とはいえ、このように幼年に洗礼を受けた人間が、その後も苦しみや悩みがなく過せたかと申しますと、それは決してそうではありません。むしろ自発的な改宗者でなかった私はやがて青年時代にはいり、本などを読みはじめてから、かえって動揺や悩みを持ちはじめたのです。

それは正直に申しますと、信仰を持っていない苦しみというよりは、信者であるための苦しみといった方が良いでしょう。長い期間の間、私は自分の背に負わされた基督教の信仰が非常に重荷になり、また、そうした宗教そのものにも懐疑さえ抱いたこともありました。当時、私は、自分のように何も知らずに洗礼を受けた者に比べて、人生の迷い、長い思想的な曲折を経て教会にはいった人たちの信仰に深い羨望さえ感じていたのです。

ですから今、「信仰と私」という題でお話することは私にとって、ある恥ずかしさを感じさせます。私には十分なその資格がないように思えるからです。けれども、私の尊敬しているある司祭の言葉によりますと「われわれは毎日、洗礼をうけねばならぬ。基督教は絶えざる改宗の連続だ」とのことであります。それから、私が信仰者として今日まで持った自分の動揺や、不安、そしてそれをどのようにして越えたかを少しお話しても差支えないだろうと思います。

私が自分の信仰の問題として苦しんだことの一つに日本人的な感覚と基督教との矛盾というこ

とがあります。

勿論、日本人ということと基督教の信仰というものは論理的に反するものではありません。信仰とは人種や国境を越えたものですし、その教えが普遍的なことも確かです。

けれども、私はほかの国に生れたのではなく、基督教の伝統も文化も歴史も全くなかったこの日本に生れたのでした。私の心の中にはこの基督教に浸されていないもの、むしろ基督教とは相反する感覚が、かくされていたことを、私は青年時代になってやっと気づいたのです。

それが何であるかは、後で申しあげましょう。しかし、こういうことを想像して下さい。私は仏蘭西に行った時、何よりも羨望を感じたのは、あの国の何処にも基督教というものがしみこんでいたことです。丘の中に、畠の中に、土地の中に、長い長い基督教のにおいや風習や感覚が根をおろしていたのです。どの村にいってもそこにはひなびた教会がある。その教会の周囲に人々は生活し、働き、死んでいく。野原には古い聖母像がある。家庭の部屋には十字架がかけられている。そういう外面的な日常生活の形成は勿論、彼等仏蘭西人の文化の中にも、歴史の中にも長い、もう除くことの出きない基督教の伝統がひそんでいるわけです。

このような基督教伝統や生活感覚は、西洋人の心の中には、決して消すことができぬほど、指の先までしみこんでいるのではないでしょうか。私は文学をやる人間ですから、彼等の書いた小説や評論をよく読むことがあるのですが、その中によし基督教のキの字もないにせよ、あるいは

基督教を否定したものにせよ、この宗教が何等かの形で彼等の頭から離れぬことがよくわかるのです。たとえ彼等が基督教やその神を否定する場合にせよ、そうしたものを常に念頭においてかかっているわけです。

だが私たち日本人の方にはこうした基督教の歴史も伝統も感覚も文化の遺産もありません。そうした歴史や伝統がなくても信仰というものも持てるものだと言われればそれまでですが、けれども、もっと怖しいことはこの日本人の感覚には基督教をうけ入れない何ものかがあることなのです。私は青年期のはじめ頃からこの日本人の謎のような感覚を自分の周囲のなかに、いや自分の中にさえ発見して愕然としはじめました。

基督教と相容れない日本人の感覚と私は今申しましたが、それは大別すると神にたいする無感覚、罪にたいする無感覚、死にたいする無感覚と申し上げることができましょう。

私は先ほど基督教をもった西欧人にはよしや神や教会を否定するにせよ、その神というものを念頭から離すことができないのだと言いました。つまり彼等の無神論でさえも、常に神を前提としてなりたっているわけです。神があるか、ないかという問題の後に神を否定した無神論です。だが、私たち日本人にはこのような無神論はありません。あるのは神の存在にたいする無関心さ、無感覚です。つまり神があってもなくてもどうでも良いという無関心の方が私たち日本人の心には強いように思われるのです。一言で申しますと、日本人の感覚の中には神を必要としない

ものがひそんでいると言っても差支えありません。

それは何故だろうと私は当時、この神を必要としない日本人の感覚に一種の恐怖を感じながら、しかしそれを自分の周囲や、いや私自身の中にさえ発見したのでした。基督教の歴史や伝統がないためだろうか。いや、それだけではないようでした。むしろこの神にたいする無関心さはもっとも東洋的な宇宙観や東洋的な汎神論から来ているようであり、日本人には長い間、ぬきがたいほど培われてきたものだと私には思われました。

神を必要としない日本人はまた罪の意識の点でも基督教と相反する感覚をもっています。私は日本人には罪の意識がないとは決して断定はいたしませんが、しかし罪にたいする反応が西欧人とわれわれ日本人とは非常にちがうことは認めざるをえません。勿論、私はここでむつかしい議論をするつもりではありませんから詳しいことは避けたいと存じますが、少くとも日本人の感受性からみると基督教が教える魂の死としての罪の意識があまりにも極端なもの、余りに重くるしいものにうつるのではないかと思っています。たとえば古代の日本人にとって罪とは肉体のけがれとして受けとめられなかったと折口博士は書いていられます。つまり肉体をけがす汚いものや病気や害虫などが悪とし受けとめられたというのです。この折口博士の説の是非は別としても、われわれ日本人は社会的な約束を破る行為か、あるいは美的な調和をそこねるものを悪とよびつづけてきたことは確かです。この美しいものの調和をそこねる行為を悪とみなした日本人の感覚

は、たとえばある人間を判定するのにも「正しい」とか「悪い」とか言う前に「あいつはいさぎよい」とか「きたない奴だ」という審美感の方が先に働く態度にもあらわれています。この道徳感にたいする日本人の審美感の優位がたしかに基督のもつ峻烈なモラルの意識をわれわれに受けつけなくさせているのです。

神にたいして無感覚、罪悪感にたいしても極端な考え方をきらう日本人がどのようにして本当に基督教信者となるかということは、私をながいこと苦しめていました。私は文学をやる人間でしたから先輩の作家たちの中にも基督教の洗礼をうけた人々のあるのを発見し、それを興味深く調べたことがあります。たとえば島崎藤村、たとえば正宗白鳥、たとえば北村透谷——たとえば国木田独歩というような人たちが若い頃、基督教に帰依したことは周知の事実です。けれどもこれらの人たちはやがて殆んどすべてが、いつの間にか、この信仰から離れていくのです。のみならず、彼等は信仰を捨てた時、別に神にそむいたという苦痛感も罪悪もありません。このことは私に基督教がこうした日本の知識人にも、根本的にくいこまなかった何かがあるのではないかと思わせるのでした。つまり彼等は若い頃、自分の中にひそんでいる、日本人としての反基督教的な感覚に気づかずに洗礼をうけたため、信仰が遂に本ものとはならなかったのです。

私はまた多くの日本文学者や知識人がその人生の終りに、東洋的な諦めの世界、つまり汎神論の世界にはいっていく事実を考えました。この東洋的な諦念の世界こそはおそらく日本人のだれ

もが心の中に郷愁としてもっているものですが、これこそ基督教とはもっとも相反したものなのです。それは神の代りに大きな自然や、宇宙にそのまま吸いこまれていきたいという感覚です。

私はこの十年近くの間に悲しいことですが、三人の親しい友人を次々と失いました。彼等は皆、人生や生活に疲れて自殺したのであります。

この三人のうち二人は山の中で死んでいきました。雪のふる山の中に姿を消してしまったのです。私は彼が自殺したという報をきいた時、その男が何のために死んだのかよくわかりました。彼はもはや人生や生活と闘うことをやめて、永遠に眠ることの方を選んだわけです。死というものは神について関心のない彼にとって動物的な恐怖を起すかもしれませんが、その恐怖さえこえてしまえば、アトは永遠に眠ることのできる世界だったのです。もはや苦しんだり、悲しんだりする必要もない、もはや闘ったり傷ついたりする必要もない、ただ永久に昏々と眠れる世界が、私の友人にとっては必要だったのでありましょう。この死と眠りとの相似た関係は、やはり、東洋人の諦念に独得なものだと私には思われました。

正直な所、私は当時、自殺した友人が羨しかった。その頃私にも人生に疲れ、人間にくたびれる時が屢々ありました。しかし私は自殺することができませんでした。なぜなら、カトリックはこの自殺を大きな罪として禁じていたのですし、それよりも基督教の世界では、死が永遠の眠りに結びつくということはないからです。死んだ後、人間は神の裁きをうけねばならぬ。この裁き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com